世の醜男醜女に与う

――美醜闘争論――

一

無産階級の進出を価値づけているものは、その伴っている驚天動地、嵐の吹きすさぶような、雷の鳴りとどろくような、そしてそれが出はじめの頃、それは単なる妄想であり、わらうべき世迷い言といわれた社会主義の思想であります。無産階級から社会主義をとりのけたなら、そこには何が残るでしょうか。

無産階級の進出とは何ぞや。これ社会主義であるといっても必ずしも過言ではない。

もしも新しい登場者が、ほんとうに新しい登場者であるならば、かれは何らかの驚天動地的な、しかしその実最も地低いものであるが、これまで誰も取り上げなかった新問題をひっさげて、万人の前へ、そっとか、仰々しくか、ともあれ持ち出す。

婦人の進出は、二十世紀における新現象であります。婦人は、新登場者であるが、何を携えて諸君の前へ、出てきただろうか。諸君に対して、特に婦人自ら、幾千年来の沈黙を

破って何かものをいう。そもそもそれはどういうことを？

二

新登場者の提出する新問題は、単に新登場者自身にのみ関係している事柄であってはならないし、また事実そうでない。もとより新登場者の新発見は、己れの境遇、己れの経験に基づいているものであることは言うまでもない。しかし、それが既に発見されるや、事柄は全世界的であることが、まもなく承認されるであろう。

この意味において、婦人が諸君の前で語る新問題は、それが本当に新しいものであるならば、婦人自身のみの関係したことでなく、直接的に全人類的、全世界的な何ものかでなくてはならない。

私はいま、そういうもののうちの一つであると、確かに私自身信じていることについていってみたいと思います。しかしもちろん、それは大きな問題で、私はただ、その問題の提出者であるに過ぎない。私ども婦人が、私どものこれまでの生活経験に基づいて、多くの疑いをもった、そして、今私がいおうとしている、しかも漠然としか言えないことを苦しく思っているその問題は、そうした多くの疑いのうちでの重要な一つであります。全人類は、将来この問題を慎重な態度で考究するであろうし、しなければなるまい。それは生物学的にも、社会学的にも、はたまた新生活を打開するためにも、一つの重要な、従って

興味の多い対象となるであろうと信ぜられるものであるからです。しかし、そうした新事実というものは、たとえばかの社会主義がそうであったがようにきわめて下らない、非実際的、非現実的な、滑稽化された思考上の遊戯と考えられるでありましょう。それはどうでもよい。ともあれ私ども婦人の側から投げ出すある何ものかであることだけは、認めていただくことができると信じます。

三

人はその生まれるや自由である。しかし、至るところ鉄鎖につながれている。とりわけ婦人の運命が、ごく下らないと思われる一つのこと、それは「美か醜か」というこの一卑俗な一事に、全然かかっていないまでも大部分かかっていることを、いままでの人は、ことに婦人は何故静かな、そして疑いぶかい目で見つめなかったか。

しかし、ある人はこの事実を否定するであろう。それは何ら経済的基礎を有しない時代の婦人の悩みであるというであろう。否、大いに否。婦人がそれを、その経済的基礎を獲得したならば、なお一層美へ！　美へ！　そして美人の価値は社会的にいやましに高く、醜婦は見事に蹴落されるであろう。

美人が恋愛場裡における勝者であることは、経済的基礎の有無に関しない事実である。否、経済的基礎の有無はなお一層美人の価値とその美の進展を助長するであろう。然らば、

今日の恋愛場裡においてそうであるように、将来の恋愛場裡においても、美人こそは絶対的な勝者であり、醜婦はみじめな敗残者であろう。恋愛場裡における敗残者であることは、婦人にとって致命傷である。それらの婦人は、もしそれが誇りの高い婦人であるならあるほど、一生独身であるほかはない。不満と嫌悪と憐憫による結婚、恩恵めいた性交にもとづく受胎、そういう結婚や受胎を歓迎する何等の理由もそこにはないからであります。

だが、禍はそれのみにとどまらない。今日でこそ、美人の活躍する世界は多少とも限られている。即ち彼女たちはもっぱら恋愛市場および結婚市場をうろついているに過ぎぬ。それは今日の婦人の地位が、なおいまだ恋愛、そして結婚によって食っていかねばならないからであります。ですが将来にあって、婦人が自らの経済的基礎を固めたならば、もはや美人の活躍は、全面的なものとなるでありましょう。

政治運動に、芸術に、科学に、これらの方面においては、従来は多く美人に反している婦人、恋愛市場の落伍者である婦人が進出して優越意識を満足させていた。しかし、いまやこの圏内にまでも美人が入ってきたとき、結果はどうでありましょう。

花のような革命婦人は、貧弱な婦人に比べて少なくとも大衆を「獲得」するであろう。政治というものが大衆を「獲得」しなければ遂行のできぬものであるとするとき、かならずや大衆は彼等の正面に、そして一段高い壇上に、指導者と称する者の群の中に、醜婦のあるを好まず、輝やかしい女性を戴くことを決議するであろう。

「それは不健全なことである。政治の仕事はもっとずっと堅実な意味をもっていなければならない」といったところで、同じ堅実な思想なり技術を有していて、一方は美貌の所有者、他は醜婦であるとき、衆望の帰するところはそのいずれであろうか。

科学者の場合すら、端正な容姿はその深い学殖にとって最もふさわしく、好ましいものと考えられているでありましょう。まして芸術家のごとき、それはある意味における極めて華やかな社会的存在であります。

古今を通ずる女流詩人の代表者とうたわれ、いまなおその名の衰えていないギリシャのサッフォの妙なる詩を愛誦する人々が、同時に彼女の醜いことを望む不心得者の群であろうとは夢にも思われない。

光曜のうちにいます
不死のアフロディテよ
ツオイスの娘、女魔術者
我は君に願い奉る

と、手には黄金作りのリラを持って、声も華やかに歌ったであろう彼女を、マイシモステュリオスとやらが、「小さくて黒い顔」という記録を残したとて、信ぜられることではない。

四

しかし、こんなことを言ったり書いたりするのは、何かよっぽど気ちがいじみた、ひねくれたことのように思われるであろう。そういう陰気な（おお何故に？）ことには関係なく、高く、明るく、朗らかに、われらは生きているとでもいうように、殆んどすべての婦人がとりすましたような風を装っているが、その実はどうであるか。

殊に醜い婦人たちは、一層そうした問題には触れまいとしています。触れると、何か負け惜しみでもあるように思われはしないかと考えています。

少し前までは、否、今日でも田舎では、貧乏人が自ら貧乏であることを恥と思っています。巡査が「俺は無産者ではない。俺は生活に困らない」といったということであるが、生活に困るということを、彼等貧乏人は隠せるだけ隠そうと思っている。

それと同じように、醜婦もまた醜婦であるといわれたくないし、思われたくもないと考えている。このことは醜男の場合にも当てはまるでありましょう。それであるから、醜男にせよ、醜婦にせよ、こういうことが問題となるとき、彼等はきわめて不自然な、超然とした態度となり、おどけた風をしてごまかしている。

彼等は何ゆえトルストイと共に「自分は何という醜い男に、または女に生まれたろう。自分は切にこれを悲しみ、そして怒る」という態度をとらないのだろうか。事実、彼等が醜男であり、醜女であることは、ごまかそうとてもごまかしきれない悲惨事であり、不仕

合わせではないか。

もしそれ、彼等が演壇に立つとき、その貧弱な風采は、とうてい他の輝やかしい男女と伍することができない。「われらのレーニン」は醜い小男であるよりも、他の側に属しているほうがよい。少くとも政治的価値、然り指揮者としての実際的な価値というものは、そういう点にある。

その上、醜男というものは愛されはしても恋されはしない。そこには消すことのできない大きな寂莫が横たわっているでありましょう。「愚劣な女どもめ。容貌以外の真価を知らない奴どもめ」と怒鳴りたくさえなるでありましょう。そうかといって、そういう男たちも醜婦から恋されることを、あまり歓迎しないでありましょう。

こういうことは、現代では滑稽化されてしか考えられない。丁度昔、貧乏人、下司、下僕などの姿が、戯画としての、歌舞伎芝居ではデク蔵としての値打ちしかなかったようにである。

いつの時代にあっても、問題にされないもの、注目されないものの姿は、それが無惨であり、不幸であればあるほど汚ならしく、醜く不快であり、そして最上の好意的な態度は、それを滑稽化して考えることであるとされます。

なぜ人々はそうした悲惨、そうした不幸を心から悲しみ、怒ることができないのだろうか。たとえそれが人々の考えているように「天」の仕業でありましょうとも、それなら「天」

を憎むがよい。否、それよりもその「天」なるものを暴露し解剖するがよい。科学者の冷たいメスを揮うがよい。何ゆえ美醜があるか？　美醜の原理は何か？　「それは他の生物界にも見受ける自然的現象で、仕方のないことだ」と、常識的に軽く考えるものがある。例えば昔、貧富とか強弱などは生物界における生存競争にあらわれている事実で、人間の力では何ともしがたい。またこれが自然だなどと考えて、資本主義および強権制度を少しも疑わなかったことがあるように。

しかしながら今日では、それらの貧富とか強弱などということに関する考察は、意識的であれ、無意識的であれ、組織を利用する野心家どもの独善的な思想であることがわかった。従って、過ぎし日、自然の名における、天の名における絶対的な恥辱を蒙っていた貧乏の子等、奴隷の仲間たちに解放の序幕としての精神的自由が与えられた。

精神的自由、これは非常によいことであり、望ましいことであります。見よ、いまや彼等は貧乏人であることを少しも恥と思わない。それは何故かというと、貧乏人というものが天とか自然とかの産物でなくして、人為的に構成されたものということがわかってきたからであります。彼等は、肉体的にはなおいまだ、少しも解放されていません。しかし「貧乏人はどこからきたか。どこへいくか」ということが学問的に考察されただけで、貧乏人の救いがたい絶望と恥辱をことごとく除き去ったのであります。そしてこのことは、彼等の人生観ないし世界観をいかに明るくしたことだろう。のみならず彼等の生活態度を、今

日見るような積極的なものとした。しかも、しかもこの時、かっては戯画中のあわれな主人公でしかなかった彼等の姿が、何と輝かしいものとなったことでしょう。

このように、天とか自然とか絶対とかいうことは、さまで権威あることではない。もし真に科学的に、その天、その自然、その絶体を観察したならば、天動説を地動説としたほども逆なものとすることができる。

美人、醜婦、かれらは何処から来たか。そして何処へいくか。その与えられた容貌というものは、はたして「天」によって作られたものであるか。それとも「人」によってか。もし「人」によって作られたものであるとすれば、それは何のために？

かようなことが科学的に考究され、明らかにされたならば、ただそれだけで今日絶対的な屈辱と絶望との中にいる人々に、朗かな精神的自由を与えることができるようになるでありましょう。

しかし、こんなことをいう人があるかも知れない。「醜男や醜婦などというものは、貧乏人のようには多くはない」あえて答えましょう。それと同じように多い！

舞台に少数のものの輝いているとき、それは少数とは意識されない。その光は全面的である。それもその筈、あらゆるすべてのものが、その光の味方である顔をしている。すこしも悲惨でなく、不仕合わせでない顔をしている。私は洗湯で、大多数の婦人の醜婦であることを看破する。少くとも街上における「美」から、遙かな距離のあることを。

人の妻見て
我妻見れば
見れば
深山のおくの
こけ猿めが
雨にしょぼぬれて
ついつくぼうたに
さも似た

という歌があるが、うがち得て妙であると感ずる人々は、かならずしもそれが、我妻のみでなく、人の妻もまた、同じこけ猿の眷族であることを悟るでありましょう。ストリンドベリーは、恋女房の寝起きの顔を見て、始めて彼女の真価を知ったというが、ともあれ、多くの婦人は、人が、そして世の中が認めているほどには美人でない。さればそれらの婦人たちは、おもてむき美人の味方である顔をし、少しも悲惨でなく、不仕合わせでない風をしているけれど、足らぬところにオガ屑をつめ、皮膚の上へ墨や土を塗っているものだから、なんどき雨のため、風のために暴露されるか知れない。そこには内心において、いかほどな苦心と不安を感じていることか。即ち美人でないことの体験を、こういう風に彼女たちはしているのです。

こういう体験というものは、全く陰気な、面倒な、そして不快な、不自由なものであります。これらの美人でない婦人たちは、自分で自分に訊ねます。オガ屑をつめたり、墨を塗ったり、こうしたあらゆる喜劇を演じなければならないというのは、いったい何のためなのか？　これらの行為は、明らかにごまかしであって、婦人解放の精神に反している。何のためにこういう情ない、気持のわるい振舞いをするのであるか。

かくてこれらのエセ美人たちは、醜婦としての立場を悟るのであります。醜婦というものは、きわめて少数であるように思っていたけど、その実そうではない。かの街上における被暴露者、われらの仲間は貧乏のためにか、多忙のためにか、あるいはまたその性格なり、その他の理由なりに妨げられて、われらのような、ごまかしの手段を戦いとることのできなかった人々でしかない。

この意味において、無産者が大多数であったように、醜婦もまた大多数であったことが始めて切に考えられるのです。

では婦人はそうであるが、男子はどうであろうか。これとても、醜男の多いことを指摘するに、少しのためらいすらない。彼等がわずか数日、髪を刈り、鬚を切ることを怠ったならば、地上には最早や近代的男性を認めることはできない。街上をさまようものは、まさしく醜人の群であるか、それに似寄りの者たちである。美とは何ぞや。自然に反する営みであり、はかない努力の積み重ねである。

しかしながら、自然そのものが美であった時代もあった。だから、今日見るような美が、必ずしも永遠の美であるかは保しがたい。とはいうものの、かような想像は、あまりに漠然としている。かつまた、右のような論法を以て、大多数の男性を醜であるということには、多少の詭弁の潜んでいるように思う人もあるかも知れない。

もし、そうであるなら、第二の方法によって、直ちに再び、それの真理を暴露するでありましょう。それは、日本における大部分の男性が、国際的に明らかに醜ではないかという事実に対する指摘です。矯小な体軀、吊るし上がった小さな眼、低い鼻、色のある皮膚、かようなことは、まさしくインターナショナルにおける一つの悲惨事ではないでしょうか。

おお、かくて美と醜の問題が、必ずしも少数者のものでなく、日本においても、はたまた世界的にも、実にそれは大多数者のものであることがわかります。

もし美が、そして醜が、天の与えたものであるとするならば、天は白色のやからに厚く、すべてのアジア人あるいはその他の者に薄いといわねばなりません。

しかしながら、必ずしも巨大な体軀が短小なそれに比べて、絶対的に美である理由はない。それと同じように、何故鼻の低いことが醜であるか。ある人はいうであろう。それは優生学的標準によって、と。

だのに、かの火星人に関する学者の説によると、もしかの星に人が住んでいるとするならば、それは頭脳のみが大きく手足の畸形的に細長い生物であろう。何となれば彼等は地

球人に比べて、ずっと進歩し、進化した世界と自然との中に住んでいるであろうからというのです。

こうした想像は、常識的な優生学的考察のすべてを踏みにじるものではなかろうか。

もしそうであるならば、身体の不均整が、かならずしも不健全を意味しない時代もありうる。すべての健全とは、そして美とは何であろう。それは四囲の境遇——すなわち社会的、自然的な境遇への適応がそれではなかろうか。

とすれば、今日における男女および女性美はと問われたとき、あえて答えたい。それは強権社会の産物であると。

見よ。巨大な体軀、光る眼、傲慢な鼻、これらの諸条件は、まさしく高所から人民を見くだし、仰えつけるにふさわしい。それこそ人民に対する政治的価値の象徴である。故に私は、かかるタイプの男性、すなわち今日最も尊重される男性美に対して、何となき反感をもつ。かようなタイプは最早や古い時代の美であって、私どもの想像する美は、むしろ親愛な日本の男性諸君に近いもののような気がする。

ヨーロッパ文明は亡びる。そして同時にヨーロッパ美も。かくてそれらの文明と美との母胎である強権社会を排し、アジア的、自治的社会を諸君がもとめられるとき、そのときこそ新しい男性美もまた、そこに芽生えるでありましょう。

これと同じように従来の婦人美は、もはやいうまでもなく、それが従来の強権社会に必

要な、玩弄的なものであったことが考えられるであろう。

そして、玩弄的なものとして、とりわけ大胆に、誇張的に、進歩発展している事実を、いうまでもなくヨーロッパに見ます。（アメリカを含む。何となればアメリカ文明はヨーロッパ文明の最後のものに過ぎない。そしてすべてのものは最後の場面において、特にそれのもつ全性質を暴露するのである）むしろ、親愛な日本の女性諸君に、私は多くの未来の女性美を想像することができるような気がするのである。

五